

「**燈（ともしび）として生きる教会**」

詩篇 15 篇（新共同訳）

I 導入部

- みなさん、おはようございます。お久しぶりです。この3月まで3年間青年担当牧師、ユースパスターとして奉仕していた教会に、本当にかわいがっていただき、お世話になったこの青葉台教会にこのようにして戻って来られたことに心から感謝しています。
- 特に今日は妻の寿子と、5/11に生まれた息子の燈生を連れてきました。客観的に見て世界一かわいいです。
- では、一言、祈りをもって、この説教を始めたいと思います。
- 3月に私がこの教会を去るときに、また戻ってきますと言いました。そして、約束していたのが、戻ってくるときには、詩篇の続きをやるということでした。
- 昨年1月から、詩篇1篇から始めて、ずっと毎月ひとつずつ詩篇を読んできましたが、その続き、今日は詩篇15篇から語ってまいりたいと思います。

II 本論部

一、主よ、どのような人が

- 詩篇15篇は大変シンプルな、簡潔な詩篇です。そして、その簡潔さとは裏腹に、非常に難しい詩篇です。
- この詩篇の前の14篇までは、何度も、悪人とは、神を信じず、神に逆らう人とはどのような人かということが歌われていました。それに対して、この詩篇15篇では、どのような人が神の前に正しい人かということについて描かれているのです。
- それでは、1節からをご覧ください。

1【賛歌。ダビデの詩。】主よ、どのような人が、あなたの幕屋に宿り／聖なる山に住むことができるのでしょうか。

- ここにある「**幕屋**」とは、かつてイスラエルの民が神を礼拝したテントのような場所です。「**聖なる山**」、それはシオンの山、つまりエルサレムだと思われます。エルサレムそれは、神殿が置かれた、礼拝の街です。
- そこに「**宿**」ることができる、「**住む**」ことができる人はどのような人か？つまり、神を礼拝し、神とともに生きることができる人はどのような人か、と問いかけた上で、2節からをご覧ください。

2 それは、完全な道を歩き、正しいことを行う人。心には真実の言葉があり**3 舌には中傷をもたない人。友に災いをもたらず、親しい人を嘲らない人。****4 主の目にかなわないものは退け／主を畏れる人を尊び／悪事をしないと誓いを守る人。****5 金を貸しても利息を取らず／賄賂を受けて無実の人を陥れたりしない人。これらのことを守る人は／とこしえに揺らぐことがないでしょう。**

- 2節の「**完全な道を歩**」くというのは、生き方として完全であるという人です。
- 「**心には**」とありますが、ユダヤ人にとって「心」とは存在全体を意味します。なので、「**真実の言葉**」が建前ではなく、本音として溢れている人であるということです。
- 3節からも、「**舌に中傷をもたない**」「**友に災いをもたらず**」ない、「**親しい人を嘲らない**」などと、「舌」、「嘲り」など、「言葉」の問題が登場します。
- 4節の「**主の目にかなわないものは退け**」は、別の訳では、「神に捨てられた人を、その目はさげすみ、」となっています。確かに、「**もの**」を「**人**」にとらえた方が、後半の「**主を畏れる人を尊び**」とセットになりますが、すごいこと言いますよね。
- これは、それほどまでに罪を憎む姿を描いているのではないかと思われそうですが、さらには、「**誓いを守る**」という、ここでも「言葉」における誠実を描いています。

- 続く5節について、「賄賂」が問題であることは分かると思いますが、「利息」を取って貸すのがダメだとなると、銀行はどうなるんだと思われるかもしれません。これは、当時のイスラエルには福祉も銀行もなく、そのなかで個人が金を貸し、利息を取るという行為は貧し人から搾取する行為だったということが背景にあります。ですので、意味するところは、貧しい人を搾取しないで、社会的正義を実行する人であるということです。
- そして、最後に「**これらのことを守る人は／とこしえに揺らぐことがないでしょう。**」とまとめられています。
- このように詩篇 15 篇を読むとき、どのように思うでしょうか。
- 私自身、賄賂や、搾取であれば、まだ「やってません」と言えます。ただ、実際に賄賂を渡していなくても、人を自分の思い通りにコントロールしようとしたり、あるいは搾取については、直接やることはなくても、社会構造としての搾取に加担したりということもあります。
- 4 節、「**主の目にかなわないもの**」だと分かっているながら、誘惑に負けてしまうことがあるでしょう。
- 3 節、言葉において、失敗することがある。思ってもいないことを言うってしまうということもあれば、実は思っている本音が出てしまう。つまり「心」の問題がある。
- あるいは、良いことをしていても、動機の問題がある。そう考えると、とても、「**完全な道を歩**」いるなどと言えない現実が私にはあります。
- そうすると、じゃあ私は 1 節にある通り、「**あなたの幕屋に宿り／聖なる山に住むことができる**」ないのではないか。
- 5 節後半に「**これらのことを守る人は／とこしえに揺らぐことがないでしょう**」とあるということは、私は揺らいでしまうのではないかと不安になるわけです。

二. 律法主義でも無律法主義でもなく

- 私たちが聖書を読むときに、このような無理難題を語っているかと思われるような、圧倒的に高い基準を示している箇所に出会うことがあります。そのようなときにあり得る反応は二つあります。
- 一つは、「読まなかったことにしよう」と言って読み飛ばすことです。とはいえ、詩篇を連続でやっている以上、読まないわけにはいかないもので、今回も取り上げていますが、本当に読まないことはないとしても、これができなくてもイエスさまの十字架と復活によって赦されている。だから、これができなくて良かった良いのだ。そのような形で読み飛ばすことはあるのではないかと思います。
- もちろん、これはそのとおりなのです。何ができなくとも、ありのまま、あなたは愛されています。どれほどイエスさまに従えなかったとしても、妥協してしまうことがあったとしても、赦されるのです。あなたが、自分で自分を赦せなかったとしても赦されるのです。なぜなら、イエス・キリストの十字架はそれほどまでに「重い」からです。
- ただ、じゃあだから無視していいのかと言えば、そうではない。あるいは、どうせ無理だ、どうせ自分は変わらない、無力だ。もちろんそのように自分の弱さを知ることは大切ですが、それで終わってはならないのです。
- みなさんは「律法主義」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。これは、～しないと救われぬ、～しないとダメなクリスチャンと他人や自分を裁く考え方です。これはイエスさまの時代のファリサイ派に見られる考え方で、私たちもよく陥りますが、イエスさまが強く戒めている考え方です。
- ただ、同時にイエスさまが戒められているのが、「無律法主義」という考え方です。それは、もうイエスさまが来られ、十字架にかかれて罪赦された以上、もはや律法、こうしなければならぬなんてことはない。赦されるんだから、何でもあり。これは新約聖書に出てくるコリント教会が陥った考え方です。
- 繰り返しますが、赦されます。何をしたとしても、どれほど罪が重くても、赦しがあります。救われるために、正しい行いをする必要はありません。
- しかし、赦された、救われたことを知ったとき、感動が生まれるのです。私もあの大学一年生の夏、経験しました。赦してくださった方、救ってくださった。この方のために、何か私にできることがあるならばしたい。
- そして、そのように願うとき、イエス様がみことばを与えてくださり、復活の力、聖霊の力が注いでくださり、もちろんすぐに完全ということはありません。ゆっくりと、律法に従って生きる者

へ、神に従って生きる者へと変えられていく。あなたは変わることができる。これが福音の大切なメッセージなのであり、このような箇所に出会うときに心に留めたいことです。

- イエスさまご自身が、このように言っています。マタイ 5:14 からをお読みします。開かれても結構ですが、短く、また有名な箇所ですので、聞いていただくだけでも構いません。マタイ 5:14 から。

14 **あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。**

15 **また、ともし火をともして灯の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。**

16 **そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」**

17 **「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。**

- ここでイエスさまははっきりとされています。イエスさまは、律法や預言者、つまり旧約聖書を廃止するために来たのではない。「**完成**」するために来た。
- イエスさまは、旧約聖書の教えを、律法を完全に守られました。詩篇 15 篇にあったように、「**利息**」を取って、搾取するどころか、悩む人、病気の人、貧しい人のために、与え尽くされました。
- 「**賄賂**」どころか、人を自分の思い通りにコントロールしようとしたりするのではなく、むしろ自由を与えました。
- 誘惑に負けることなく、「**主の目にかなわないもの**」は退け、言葉において失敗することもなく、行動においても、思いにおいても、あの十字架に至るまで、「**完全な道を歩**」まれました。

- そのイエスさまに倣い、世界を変える存在として、イエスさまはご自身のからだなる教会を生み出してくださいました。

- イエスさまは今日も教会に、私たちに言われている。「**あなたがたは世の光である。**」

- 実は、この箇所は、私の長男、燈生の名前の由来となった箇所です。燈（ともしび）、つまり闇の中で輝く「**世の光**」として生きる教会を建て上げる人であって欲しいと願って名づけました。

- 彼自身が、個人として、「**世の光**」として生きるのではなく、交わりのなかで、「**世の光**」として生きることを願って、この箇所から名づけました。

- 私たちは、たった一人で「**世の光**」として生きることはできません。この詩篇 15 篇も、神の民であるイスラエルがともに賛美しました。私たちが、「**世の光**」として生きることは、交わりのなかでのみ実現するのです。

- そして、イエスさまは言われました。「**山の上にある町は、隠れることができない。**」。これは当時のイスラエルにはギリシャ風の白い家があって、それが太陽によって反射して輝く姿をイメージしていると言われます。

- 15 節の「**ともし火**」も、当然のことながら自力ではなく、火が点火されることによって燃えるのです。つまり、自力で光輝くものではありません。神の愛を受けて、神の愛によって、光輝くのです。

- ここでもう一度詩篇 15 篇に戻ります。1 節、「**主よ、どのような人が、あなたの幕屋に宿り／聖なる山に住むことができるのでしょうか。**」

- 本来、神の幕屋に宿ることなどできない、聖なる山に住むことなどできない私たちが、イエス・キリストの十字架の血潮により、今主を礼拝することができ、主とともに生きることができている。

- 5 節、本来「**とこしえに揺らぐことがないでしょう**」などと言えない私たちが、とこしえのいのちを与えられた。

- この大きな恵みのゆえに、この愛のゆえに、私たちは何度でも、赦されることができる。みことばにより、復活の力、聖霊の力により、変えられることができる。あなたは変わることができる。それが福音のメッセージなのです。

- もう一度、マタイに戻りますが、イエスさまはこう仰られました。マタイ 5:17 **「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」**

- 無理して良い行いをするのではない。ただ、主イエス・キリストの恵みによって、神の愛によって、聖霊の交わりによって、生き方が変えられるからこそ、神が与えてくださる光によってのみ光り輝くからこそ、私たちではなく、神が、「**あなたがたの天の父**」が「**あがめ**」られるのです。
- お金がなくてもいい、学歴がなくてもいい、能力がなくなってもいい。赦されながら、変えられながら、「**世の光**」として、燈（ともしび）として生きる教会を建て上げることをあきらめない人であって欲しいと願い、この子を燈生と名づけました。

- また、連れて来ますので、ぜひこの子のために、私たちのために引き続き祈っていただきたいと願っています。
- 今週、私たちに何が待ち受けているか分かりません。試練があるかもしれない。内にも外にも、闇が私たちを待ち受けているかもしれない。とても詩篇 15 篇が語るように正しく生きることができない現実にぶち当たるかもしれない。
- でも、それでも、赦されながら、変えられながら、主の前に正しいことを選ぶことをあきらめない生き方によって、「**世の光**」、燈（ともしび）として生きる教会として、場所は違ったとしても、ともに遣わされていこうではありませんか。お祈りしましょう。